法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-10-08

シンポジウム「加来彰俊先生のご業績と思い出」 : 学者としての加来先生（あるいは私の見た加来先生）

山田, 道夫 / YAMADA, Michio

(出版者 / Publisher)
法政哲学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
HOSEI TETSUGAKU : BULLETIN OF HOSEI SOCIETY FOR PHILOSOPHY / 法政哲学
(巻 / Volume)
15
(開始ページ / Start Page)
53
(終了ページ / End Page)
60
(発行年 / Year)
2019-03-30

シンポジウム「加来彰俊先生のご業績と思い出」

学者としての加来先生（あるいは私の見た加来先生）

山田道夫

1　加来先生と私

はじめにお断りしなければならないのですが、奥田先生から「学者としての加来先生」という論題を頂戴したものの、一体自分に何が話せるのか、思い悩んだままこの場に立ったというのが実情でありまして、皆様に配布するレジメも資料も用意できておりません。と申しますのも、最初に奥田先生からお話があったとき、それは加来先生のご業績とお人柄について語り合うような会だと受け止めて、自分も少し思い出をお話しするが、何よりも皆様のお話を伺って、加来先生を懐かしく偲びたいと思ってお受けしたわけで、この伝統ある法政哲学会の、しかもこのような立派な会場でのシンポジウムにおいて、「学者としての」加来先生を学問的に語るというようなことは自分には到底できそうにないと思われたからです。そこで今日は敬愛する古典学者加来彰俊先生との出会いとそう多くはない交わりとを想起しつつ、私の先生に対する敬愛の所以をお話しさせていただこうと思う次第です。

私は京都大学の学生で、三上先生や法政の皆さんのように加来先生から直接教えを受けたわけではありません。演習に参加してテクストを読んだり、研究講義を聴いたり、論文指導を受けたりということはなかったのです。哲学を勉強しよう、特にキリスト教学を専攻してキェルケゴールを読もうと思って昭和四六年に京大に入学したあと、二回生になって（新約聖書を読むために）ギリシア語を履修

し、哲学科の必修科目であった藤沢令夫先生の西洋哲学史古代の概論講義に出るまでは、ギリシア哲学という専門分野をとくに意識することもなく、種々雑多な本を読み漁っていました。そのなかに田中美知太郎先生の『哲学初歩』や筑摩や中公から出ていたプラトンやアリストテレスの選集があり、たぶん私が最初に読んだ加来先生の文章はそこに収載されていた「メネクセノス」の邦訳だったと思います。中公の世界の名著の月報には写真付きの訳者紹介があり、田中先生や藤沢先生や他の田中門下の方々とともに加来先生の写真もありました。また田中先生が編集された人文書院の「講座哲学大系」の第二巻に「十九世紀の哲学史家」、第四巻に「歴史記述の客観性」という加来先生の論文があって、これは二回生になってからですが、すでに田中門下のプラトン訳者の加来彰俊さんだなと承知して読んだように記憶しています。

この「講座哲学大系」は私にとって大変重要な書物になりました。というのはここには哲学のみならず多様な分野の錚々たる学者が寄稿されていましたが、とくに藤沢先生のほか、野田又夫、山田晶、辻村公一、森口美都男、武藤一雄など当時の京大哲学科の教授たちや田中門下の森進一、水地宗明、松永雄二などの先生方の論文も掲載されていて、三回生からの専攻先を模索していた私はこの書物を哲学論文の見本帖のように読んで選択の材料にしたからです。結局、キリスト教学の武藤先生や西洋哲学史近世の辻村先生の文章と思考には一向に馴染めず、藤沢先生の研究室でプラトンを読むのがよいだろうと心を決めたのですが、田中・藤沢両先生の文章のほかに、加来先生の「歴史記述の客観性」を読んだとき、その平明で丁寧な論述にこれなら解ると安心し、やはり田中門下だなと思ったものでした。

三回生になって専攻のギリシア哲学関係の授業で教えを受けたのはいずれも田中先生のお弟子さんたちで、二回生でギリシア語を習った種山恭子先生は田中先生校訂のテクストを使ってアポロギアの講読を担当され、藤沢先生のプラトンとアリストテレスの演習のうち、アリストテレスの演習には尼ヶ崎徳一先生が講師として参加され、山野耕治先生はイェーガーのパイデイアの講読を担当しておられました。そして種山先生と山野先生は授業後のお茶やお酒の席でよく田中先生や同門の人々についての回顧談を聞かせてくださったのですが、加来先生のお名前もそういう時に耳にしました。といっても藤沢先生や森進一先生が酔って京洛の街を騒がせたというような派手な話ではなく、真面目な先輩として敬意を込めた言及であったように思います。このお二人の先生とはその後も長くご一緒させていた

だいたので、田中先生が京大に来て育てられ、「兵隊帰りの殺伐な連中」と評されたお弟子さんたち、岩波のプラトン全集の編集の方々の言う「田中軍団」のなかで、真面目で律儀な番頭格の加来先生というイメージが自分の中で育っていきました。

加来先生に直接お会いして挨拶するようになったのは西洋古典学会の年次大会の懇親会に出るようになってからだと思います。覚えているのは昭和六〇年六月に東北大学で行われた古典学会で発表したときのことです。いつものように最前列中央の席に着かれた田中先生を前にして大変緊張しながら発表原稿を読んだのですが、自分でも準備不足を自覚していたうえに、田中先生は黙って聴いておられ、藤沢先生も何の擁護発言もしてくださらなかったので、大いに不安であったところ、たぶん終了後の酒の席で、加来先生が何か好意的なコメントを下さったのです。嬉しかったです。その年の一二月に田中先生が突然亡くなられました。お通夜と告別式で受付や会場への案内をしていましたので加来先生にもお会いしているはずですが、どんなご様子だったか記憶がありません。棺を運びながら森先生が号泣された光景だけが頭に残っています。

その二、三年後、藤沢先生のお宅でお会いし、初めて長時間ご一緒して親しくお話しさせていただきました。それはいつだったのか、私は昭和六二年七月から翌六三年九月まで海外研修でイギリスにいたので、たぶん帰国後の六四年（平成元年）のお正月だったと思います。その時、加来先生はご自身も寄稿された「岩波講座哲学」に収載された私の論文を読んでくださっていたらしく、わざわざご自分からそれを取り上げて好意的な論評をしてくださいました。このときのことも加来先生に褒められたのが嬉しくて記憶に残っているものと思われます。

この二度の遭遇のあと、加来先生と親しく接することができたのは、山野先生が加来先生を誘われて、北嶋美雪先生、内山勝利先生、それになぜか私も加わって、大阪で年末にフグを食べる飲み会が始まってからです。だいたいは大晦日の午後三時頃にミナミの法善寺の水かけ不動の前で待ち合わせ、近所のフグ料理の店に入り、二次会は何とかいうミナミでは名の通った喫茶店で濃いコーヒーを戴いて解散というもので、この会がいつ始まっていつ終わったのかはっきりとは思い出せませんが、おそらく加来先生が法政を定年退職される前後からで、少なくとも十数年は続いたかと思います。最後の三年ほどは加来先生の足が悪くなって、先生がご自宅からタクシーで往来できる京阪の香里園駅近くの店に場所を移して集まりました。加来先生は長く東京におられて気軽にフグをつつくということはあま

りなかったと見えて、熱燗を呑みながら「美味いねえ」とおっしゃっておられました。田中先生や軍団のお仲間たちの思い出や噂話、学会の誰それの近況や出版物などが話題になっていたように思います。私は鍋奉行、とくに最後の雑炊を仕上げるのに忙しく（たぶん山野先生はこのために私を誘ってくださったのでしょう）、もっぱら先生たちの談笑に耳を傾けておりました。ひとつだけ覚えているのは、アリストテレスの「政治学」の抄訳が平成二〇年に再刊されたときのことです。これにはあのＩ大先生が新たに解説を書き下ろされたのですが、訳者のお一人である北嶋先生がこの解説を間違いだらけのひどい代物だと言って憤慨されていました。加来先生は「へえー。そうなの」といった感じで聞いておられましたが、北嶋先生はその後すぐに当の書籍と、その間違いや不審点を箇条書きに書き出した文書を送ってくださり、私もそれを読んで、なるほどなあ、北嶋先生のお怒りはごもっともと思いました。ただＩ大先生の文章自体は平成二四年に九〇歳で亡くなられる数年前だったにもかかわらず、熱のこもった意気軒昂な文章ではありました。

献本といえば、私も何度か自分の書いたものが本になって出たときに加来先生に送らせていただきましたが、先生からはその都度丁寧なお手紙を頂戴いたしました。読んでくださったこと、あるいは読んでくださった箇所を明示して、私の勉強を労い励ましてくださいました。私が不明のまま留保していたものに、やさしく解を示唆してくださったこともあります。

私はこのようにして山野先生や種山先生やさらには田中・藤沢両先生からもその人物像を仄聞し、数少なくはあったけれど身近に接する機会も与えられて、加来先生という古典学者を知るようになりました。しかしその学問のかたちというか学者像というのはむろん、何よりも先生の書かれたものを学ぶことを通じて作られたと思います。

2　学者としての加来先生

私が三回生になって藤沢先生の演習に参加したときのテクストは「テアイテトス」でした。初歩文法を終えたばかりの私は悪戦苦闘しながらＬＳＪだけを頼りに、とにかく一通りは自分で読んでみて、わからない箇所を特定してから、コーンフォードなどの欧米語訳と田中訳を参照するというやりかたをしていましたが、当然ながら田中先生の日本語訳によって「そういうことか」と分ることが一番多く、そして修士課程で「ソピステス」に進んでから頼りにした日本語訳が昭和四六年に出た勁草書房の『プラトン著

作集Ⅰ』に収載されていた加来先生の訳でした。解説はなく、簡単な訳注が付いただけの訳書でしたが、それだけに本文の訳出に傾注したという感じで、岩波のプラトン全集の藤沢先生の訳はまだ出ていなかったので、とても有難かったです。

「ゴルギアス」は大学に入って間もない頃に中公の藤沢先生の訳で読んでいて、自分でギリシア語のテクストを読むようになって訳注や解説のついた加来先生の岩波文庫やプラトン全集の訳を参照しましたが、それらの基になった岩波の田中・加来『プラトン著作集ゴルギアス』は藤沢研究室から借り出して「研究用注」の記述をとくに丁寧に辿ったのを覚えています。この本は昭和三二年の田中・藤沢『プラトン著作集パイドロス』に続くこのシリーズの二冊目として昭和三五年に出ましたが、三冊目以降は出ないままでした。ちなみに三冊目は種山先生の「ティマイオス」が予定されていたと聞いております。種山先生は猛烈に勉強される方でしたから、これでよしと思うところに達せぬままタイムアップということになったものと思われます。藤沢先生がその『パイドロス』の改訂版を『藤沢令夫著作集Ⅳプラトン「パイドロス」註解』として出されたときのあとがきに、「序説」「訳文」「注解」「研究用注」「索引」という体裁になった経緯を記され、定職がなく貧乏で、しかし時間はたっぷりあって、酒も飲まずに（飲めずに）勉強と執筆に集中したので、序説も研究用注も長大になりながら、比較的短時間で完成・刊行に至ったことを述懐しておられますが、加来先生も弘前へ赴任される以前の、同じような境遇で、「田中先生の教室の周辺をうろつき」ながら刻苦勉励して『ゴルギアス』を書き上げられたのだろうと想像します。

先に述べた「ソピステス」の翻訳は弘前時代のお仕事でしたが、『プラトン全集一三ミノス・法律』は法政に移られて四年目の昭和五一年に出ました。「法律」全十二巻を森進一・池田美恵のお二人と四巻ずつ、加来先生は九―一二巻を担当され、全体の解説を書かれました。岩波文庫のディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝』（全三冊）の一冊目が出たのは昭和五九年で、三冊目が出たのは一〇年後の平成六年、法政を定年退職された翌年です。

平成一九年に出た『プラトンの弁明』の「あとがき」で、京都を離れられた後、「学生教育の職務と大学行政の雑務に妨げられながらも、つぎつぎに与えられた翻訳の仕事に精を出していて、論文らしいものはほとんど書くことができない状態で過ごしていたが、それでも時折、いくつかの書きものを公にしてきた」と言っておられる通り、こ

の論文集には、弘前で書かれた四つの論文「徳と知――ソクラテスにおける」（昭和四一年）、「問答法の特質」（昭和四二年）、「プラトンの政治論」（昭和四二年）、「徳と知（二）――「アクラシアー」の問題を中心にして」（昭和四三年）、そして法政での五篇、「哲人王と法の支配（一）――プラトンの政治思想についての若干の覚書」（昭和五二年）、「哲人王と法の支配（二）――プラトンの「政治家」を中心にして」（昭和五七年）、「正義論の原型――古代ギリシアの場合」（昭和六一年）、「古代ギリシア・ローマの伝統――パイデイアーの系譜」（平成二年）、「自由の古典的理解」（平成五年）が収載されています。そして定年退職後五年間の非常勤講師としての授業を終えられた平成一〇年の最終講義をもとにした『ソクラテスはなぜ死んだのか』が平成一六年に刊行されました。

加来先生はこれらの論文や論考を「それぞれの主題について、できるだけテキストに即しながら愚直で平明な解説を試みたつもり」の「拙い論」であると謙遜しておられますが、これらを読むと、加来先生の学問的志向の揺らぐことのない一貫性が強く感じられます。それはソクラテスの哲学的対話の生とその刑死の意味を問い続けたプラトンの政治思想というか、「弁明」や「ゴルギアス」の白熱迫真のソクラテスの弁論のうちに表明されたプラトン哲学の根本動機というか、とにかくテクストを丹念に広く深く読み解きながら、そういった主題に肉薄し、それを自身の平明で確固とした文章で語り直して、後進の学徒や読者に提供しようとする姿勢です。そしてそういう意味では論文ばかりでなく、加来先生の翻訳の仕事自体が自身の深い関心に基づく真摯な研究の成果としての語り直しであったのだと思います。

加来先生も言及しておられますが、田中先生はその時々の流行に乗ってオリジナリティーというか新奇を競う雑誌論文や書物は大抵つまらないから読まずともよいというようなことをよく言われました。何か逆説的で反動的なおっしゃりようですが、プラトンを学ぶ者はプラトン自身の言葉と向き合ってプラトンと格闘するのを第一義とせよ、まずはテクストをしっかり読め、ということでしょう。田中先生のもとで学ばれた門下の先生方は皆この姿勢を共有しておられますが、加来先生はこのスタンスをもっとも強く貫いて立派な業績を残された方ではなかったかと思います。

しかし加来先生の学者としてのお仕事はご自身の研究執筆に留まるものではありません。何よりも教師として学生を鍛え、後進を育成することに熱意を傾けられたように推察します。自分は法政で後を託するに足る学生たちを育て

たという自負を漏らされたのを伺ったことがあります。そしてもう一つは田中先生のお仕事のお手伝いにも相当な時間とエネルギーを費やされたということです。

私が藤沢研究室に入って気付いた頃には吉田昌市さんや山口義久さんなど大学院の先輩たちが田中先生のお宅に出入りして色々なお手伝いをされていましたが、先生は目がお悪かったので、プラトン全集の頃には門下の先生方も原稿の整理や校正などを手伝っておられたように思います。そして晩年の大著『プラトン』全四巻執筆の準備に入られた昭和五〇年頃から五九年の完結までは多くの方が馳せ参じられたというか動員されたというか、献身的に働かれました。とくに川田殖先生、今林万里子さん、山口義久さん、種山先生、北嶋先生などは原稿作成までの準備や判読困難な原稿の整理清書などに当たられて大変だったようです。種山先生は「羊と羊って何やこれと思ったら、善と美や」などと文句を言い、今林さんと山口さんが楽々と解読されるのを不思議がっておられました。そして加来先生は四巻すべての初校もしくは再校段階の校正作業を統括されたとのことです。私は修士課程の二年目に吉田さんに連れられて軽井沢の別荘に行き、食事当番をしたのが初めてのお手伝いで、その後五年か六年ほどはほぼ毎夏一週間ほど軽井沢に滞在して、毎朝の散歩のお伴やテクストの拡大筆写や辞書引きや校正刷りの音読などをしていましたが、夕食後先生のお話しを聴くのが楽しく、ありがたくも田中先生のもとで訓育に与っているという感覚でした。それに比べて、田中門下の先生がたや今林さん、山口さんたちの作業はほんとうに労苦多き献身であったように思われます。

この田中先生の『プラトン』の一〇年間、加来先生は法政で教授として勤務され、「法律」や「ディオゲネス・ラエルティオス」の翻訳を続けられながら、文学部長も務められ、『プラトンⅣ』の刊行前の作業時には常務理事の職にも就いておられました。私は大学院を終えると種山先生が勤務されていた神戸の女子大に奉職し、種山先生とはしょっちゅう一緒にいて、「田中先生から招集がかかった、ついては大学のほうは休講にでもしてもらって、ですって、呆れるわ」などとよく聞かされたのですが、加来さん、山野さんと軽井沢で合宿して田中先生の仕事をすることになったと伺ったときには、加来先生のような偉い先生まで軽井沢勤番かと驚き、感じ入ったものです。しかし種山先生はぶーたれたような言葉を吐きながら、何だかいそいそと出かけられ、山野先生は戻られて楽しそうに軽井沢でのことを話しておられました。

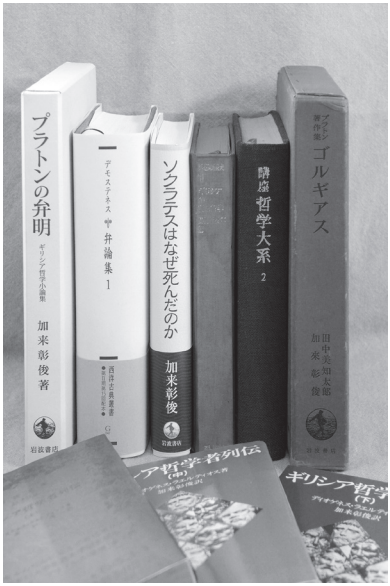
『プラトン』が完結した翌年の昭和六〇年に田中先生は逝去され、昭和六三年から平成元年にかけて、筑摩書房か

ら『田中美知太郎全集』の増補版が出ました。昭和四三年から四五年にかけて出た一〇巻に増補版一六巻が加えられたのです。加来先生を始めとする田中門下の先生方が編集委員となられて、それぞれ担当する巻を編集し、解題も書かれました。このお仕事も法政在職中のことで、法政を完全に辞められて、大阪に居を移されてからのお仕事が前記の『ソクラテスはなぜ死んだのか』と平成一八年に出た『デモステネス弁論集Ⅰ』ということになります。

「田中先生の退官を機に、解放されたいような気持から、一つの偶然を利用して、京都を離れて遠く弘前の地まで逃げた」とおっしゃる加来先生は、しかし田中先生の要請に応じて法政に移られ、研究と教育のみならず、田中先生が決してなさらなかった大学行政にまで携わって、田中先生から課された哲学科再建の務めを果たされました。弘前に落ち着いて十分な満足を感じていたのだが、先生に呼び出されて、正座してお言葉を伺った、先生は…というような述懐を私も聞かされました。田中先生を敬愛し心服して、綿密に丁寧にテクストを読み続けられた加来先生は、その文体も論述構成も田中先生の匂いを濃く宿しているように私には感じられ、加来先生の文章を拝読すると懐かしさでいっぱいになります。以上、覚束ない記憶を頼りに取り留めのない話をさせていただきました。どうかご容赦くださいい。

山田道夫（神戸松蔭女子学院大学名誉教授）

主要著作（共著・共訳を含む）右から『プラトン著作集 ゴルギアス』、『講座 哲学体系』第2巻、『思想の歴史1 ギリシアの詩と哲学』、『ソクラテスはなぜ死んだのか』、『デモステネス 弁論集1』、『プラトンの弁明 ギリシア哲学小論集』、手前 ディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝』



撮影 奥田和夫